
Angel Beats! **ある男の死に様**

死吹屍絡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats！

ある男の死に様

【Nコード】

N3201X

【作者名】

死吹屍絡

【あらすじ】

天上学園にいつの間にかいた男。
男は死後の世界でなにをするのか。
どのように生きていく？のか。
そんなお話です。

1 話（前書き）

処女作なので間違い、おかしいところがあれば教えてください。お願いします。お

1話

そこには髪を肩まで伸ばし、頭の上にアホ毛のある少し茶色い黒髪の、160後半から170前半程身長のある学生服を着た男が倒れていた。男は呻き声を出し、目を開いた。

「あれ？ここどこだ？」

男が起き上がって周りを見てみると空は薄暗く、見え辛いがここは高校のようで、世間一般ではマンモス高と呼ばれるであろうほど広いと思われる。

「なんで俺高校にいるんだ？しかもこんな夜中に」

そう言いどうしてここにいるか目を閉じて思い出そうとするがまったく思い出せない。

時間が経つにつれて男は額に汗を流し、ついには膝と両手を地面につけた、所謂orzの格好になり、

「おいおいおいおい！！なんで思い出せないんだ！？まさか俺記憶喪失！？記憶喪失になっちゃったの！？いやまだ俺が記憶喪失とは決まってるじゃない！！そう！！激しい物忘れの可能性だってあるんだ！！頑張ってる思い出すんだ俺！！諦めるな！！諦めたらそこで試合終了なんだよおおおお！！！！」

と、広いこの高校の隅から隅まで届くくらい大きな声で叫んだ。

叫んだ後、男はすぐにorzの格好から立ち上がり、ズボンに付いている砂を手で払って咳払いをし、冷静さを取り戻した後、今度は自分の事について思い出そうとする。

そして男は重要なことに気付く。

「なんでだ、なにも思い出せねえ」

ここまでのどうやって来たか、ここがどこか等の事を思い出せないのは激しい物忘れで済ませることはできる。しかし、親しい友人や家族のこと、自分の名前すらまったく思い出せないのは物忘れで済ませることはできないだろう。

つまり、男は記憶喪失としか言い様がないのだ。

男は複雑な顔をして頭を右手でクシャクシャと掻いた。

「記憶喪失、まさか自分になるとはなあ。頭の中がすっきりしているようにしていない違和感が凄い気持ち悪い」

そう呟いた後、どこからか連続して銃声が聞こえてきた。

「なんで学校で銃声なんて聞こえるんだ？ここって軍人養成学校？」男は混乱したが好奇心からか、ここから動かないと進展がないと思っただのか、銃声が聞こえたと思う方向に走ると男のポケットからなにかが落ちた。気になり拾ってみるとそれは生徒手帳のようだ。

「なんで俺こんなの持つてるんだ？俺ここの生徒だったのか？あれ？今思えば俺学生服着てるじゃん。てことはこれが俺の生徒手帳なら中見れば名前ぐらいはわかるかもしれないな。もしかしたら全部思い出せるかも」

そう言って生徒手帳の名前が書いてある欄を探し見てみると男の顔写真の横に名前が書いてあったのでよかったと思ったが男はおかしな事に気付いた。

生徒手帳には名前は書いてあったが、名前は名前でも名字だけしか書いてなかったのだ。

「なんで名字しか書いてないんだよ！？ちゃんと記入しとけよ前（記憶喪失前）の俺！！」

男は記憶を失う前の自分を呪いつつ、仕方ないと思い名字だけを確認して生徒手帳をポケットに入れ、もう一度銃声が聞こえたと思う方向へ走り出した。

向かっている先にはとても大きな建物があった。

近づくにつれ聞こえてくる銃声は大きくなり、耳を澄ませてよく聞いてみると大きな建物から音楽が聞こえてくる。

そして大きな建物の近くまで来ると辺りには銃の空薬莖らしきものが落ちていた。

「特別課外授業なんかで銃の発砲練習でもしてるのか？」

男は銃弾に当たるのが恐く思い、走るのをやめ、ゆっくり、すこしづつ大きな建物に向かって歩いた。やっと大きな建物の入り口が見えたと思うと、入り口近くでは学生四人が一人の女の子に向けて銃を撃ち続けている。しかし、撃っている銃弾は女の子に一度も当たらず、まるでバリアーのような不可視なもので守られているように周りに反射されている。

男は今自分が見ている光景が信じられず、目をこすってもう一度見てみるが、女の子の右手に刃物らしきものがついているというまた信じられない光景を発見しただけでなにも変わらなかった。男がとった行動は、

「うん、これは夢だ。夢に違いない。だってこんな光景普通はありえないじゃん。早く目覚めないかなあ」

自分が見た光景の全否定、所謂現実逃避をした。

しかしそんなことを言った直後、男の頬の近くに銃弾が通過し、男に傷と痛みを置いていき、夢だという説を一瞬にして壊していった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少しの沈黙の後、男は大きな建物に背を向け、ポケットの生徒手帳を開いた。

「そうだ。そういえば生徒手帳には寮での俺の住む部屋の番号書いてあったけ。もうこんな暗いし、どこに寮あるか分からないし、さつさと寮見つけて明日遅刻しないように寝るか」

とりあえず目の前の現実を受け止めないでおきたいようだ。

男はどこに寮があるか知らなかったので見つけるのに三時間かかり、

着いたのが十二時越えになってしまった。男はこの高校の広さを身をもって知り、明日先生に記憶喪失のこと話してここの地図をもらおうと決め、ベッドにダイブして寝た。

1 話（後書き）

どうでしたか？感想お待ちしております。

2 話（前書き）

おかしな所や誤字があるかもしれません

2話

「ふああああ」

盛大な欠伸をしながら男はベッドから体を起こす。

男が起きた時間は午前五時。なぜ男がこんなにはやく起きたかというところの学校を把握するためだ。

男は閉め切っていた窓を開け部屋の中の空気を換気した後、洗面台で顔洗い眠気を飛ばす。

「さて、行きますか」

タンスの中にある三着ある制服の一着に着替え、男は部屋から出た。

「ふう、一通り回ったから学校と寮の行き来は迷わないようになったな。あとは先生に記憶喪失のことについて言うだけだが、職員室はどこだろう？」

学校に来るにはまだ早い六時頃。男は職員室を探すために学校内に入る。

来るのが早いせいか校内には生徒は一人もいない。

一階をくまなく探すと職員室があった。見つけるのに十分もかからなかった。

職員室に入ってみるが、先生が一人も居なかった。先生でもこの時

間には来ていないようだ。

「はあ、誰も来てないか。多分先生が来るまで一時間以上あるだろうし、次は自分のクラス探しに行くか」

男はだれもいない職員室を出て、生徒手帳に書いてある自分のクラスを探しに行くことにした。

「えーと、俺のクラスは・・・ここか」

自分のクラスを見つけた男は自分の席がどこにあるか確認し、しばらく自分の席で本（机の中に入っていた）を読んで時間を潰した。本の内容が一段落つき、時計で時間を確認すると六時五十分。先生が来ていてもおかしくない時間になっていたのもう一度職員室に向かった。

今度は職員室にちゃんと先生はいた。先生の人数は五人。席に座りパソコンで作業していたりコピー機を使って授業に使うかもしれないプリントを印刷している。

男は職員室の入り口に一番近い席に座ってお茶を飲んでいる三十代位の男の先生に話しかけた。

「先生、お話したいことがあるんですけど・・・」

「ん？ああ、立木か。どうしたんだ？こんな早い時間に。勉強でわからないところでもあったのか？」

この先生、担任なのかどうかは分からないが男、立木のことを知っているようだ。

「先生、俺は勉強について話してきたんじゃないやありません」

「うん？勉強以外でお前が先生に話しかけてくるなんて珍しいな。いったい何を話してきたんだ？」

「はい、実は俺、記憶喪失みたいなんです」

立木がそう言うのと先生は一瞬驚いたような顔をした。そしてすぐ真面目な顔になり立木に話しかける。

「それは、本当のことか？」

「はい。昨晚から今まで記憶以外がまったくないんです」

昨晚から今まで記憶がない、そう聞くと先生は先ほどより驚いた顔

をして立木を見た。

「そうか……。じゃあ俺の名前もわからないんだな……。」

そう言った後、相手を労わるような顔をしながら先生は立木に話しかけた。

「忘れたものは仕方ない。時間が経ったら記憶が戻るかもしれないし、そこまで悲観することでもないだろう」

「そうですね。まだ思い出せないとは決まっていますよね。ありがとうございます先生、すこし気持ちが楽になりました」

「それはよかった。そうだ、俺は一応お前のクラスの担任だからな。名前は霧崎だ。霧崎先生と呼んでくれ」

「はい、霧崎先生」

「よし、じゃあクラスの全員にもお前が記憶喪失になったこと伝えないとな。クラスの間所わかるか？」

「はい、こちらに来る前に確認してきました」

「記憶をなくしても立木は立木らしいな。事前準備を怠らない、お前の良い所だ。じゃあ、先に行つてくれ。俺もHRの時に行くから」

「はい」

霧崎先生と話せてよかった。そう思いつつ立木は自分のクラスへ向かった。

教室ではまだHRの時間じゃないからか、そこら辺から様々な会話

が聞こえてくる。

チャイムが鳴り、隣や前の人と喋っていた人たちが静かになった。

霧崎先生が教室に入ってきて朝礼をした後、

「よし、HRを始める前にみんなに聞いてほしいことがある。立木、前に来い」

と言った。クラス中に注目されたが、立木は静かに席を立ち先生の横まで行く。

立木は前からクラス全体を見てみると、この学校では男子は襟詰、女子はブレザーのはずなのだが何人かの男子はブレザー、女子はセーラーという違う制服を着ている人がいるのに気付いた。そして全員の共通点することがあり、肩に「SSS」と刺繍してあるワッペンがついたものを着ていることにも気付いた。立木は少し不思議に思ったが顔に出さなかった。

「実はな、立木は昨晚から前の記憶がまったく無い、記憶喪失になっってしまったんだ」

先生がそう言うのとクラス全体が驚いたようにうるさくなる。

先生が「静かに！！」と言うと一瞬にして静かになった。

「だからと言って立木に対する接し方を変えないでくれ。そしてできる限り話しかけて欲しいんだ。そうすればいつか立木も何かを切欠に記憶を取り戻すかもしれない。みんな頼んだぞ」

そうしてHRは終わった。

H Rの後にすぐある一限目が終わり、立木が次の授業の準備をしていると後ろから肩を叩かれた。立木が後ろを向くとそこには肩まで髪を伸ばし、頭にヘアバンドをつけたセーラー服の女の子が立っていた。

「立木君、ちよつと付いて来てくれない？」

「先生が言つたが、俺記憶喪失だから名前教えてくれないと呼べなくて困るんだが。あとどこ行くんだ？もう授業が始まるんだが」

そういうと女の子は「いいから早く！！」と言い立木の手を掴んで席を立たせ、無理やり連れて行つた。

「いきなりなんなんだよお前！俺を授業に遅刻させるつもりか？」

そう自分の前を歩いている女の子に問いかける立木。

「その通りよ」

それに女の子は堂々と答えた。

「はあ！？なんでそんな事するんだよ！！」

「決まってるじゃない。あのまま授業を受け続けてたらアナタ、消されてたかもしれないからよ」

「消される？だれにだよ？」

「ま、それ以外にも話したい事があるからここまで連れてきたのよ。ここに入りなさい」

そう女の子が指をさして入れと言つた場所は校長室だった。

「なんで校長室に入らないといけないんだよ？」

「なんでって、ここが一番安全だからよ」

「安全？逆に言うところ以外は危険なのか？」

「それも含めて話したいことがあるから、さっさと入りなさい！」

女の子の威圧に耐えかね、立木がドアノブを握り開けようとする
と天井から巨大なハンマーが現れ、立木を外へ打ち出した。

「・・・ん、俺は、どうなっただ？」

「あ、起きた？みんな、立木君が起きたわよ」

立木は寝転んでいたソファから身を起こし、声が聞こえた方を見
てみると、そこには先ほど校長室まで無理やり連れてきた女の子、
そして肩に「SSS」の刺繍をしたワッペンをつけている人たちが
いた。

「あ！そういえば俺、校長室に入ろうとしたらなんかにぶつ飛ばさ
れて窓から落ちたんだ！あんなところから落ちたら普通死ぬはずな
のに、なんで生きてるんだ？」

「なんでって、私達はもう死んでるからよ」

「へ？」

女の子が言ったことを聞いて立木は聞き間違えかと思ってもう一度聞
いた。

「すまん、今なんて言った？」

「私達はもう死んでるのよ、この死後の世界にいるということはね」
聞き間違えじゃない上に新しい言葉が追加されていた。

「死後の世界？」

「そ、ここは死後の世界。死んだ人が来る世界よ」

「じゃ、じゃあ先生も生徒も、ここにいる全員もう死んでるって言いたいのか！？」

「全員ではないわ。先生と生徒の大半はNPCよ」

「NPC？なんだよそれ？」

「Non Player Character。俺達みたいに死んだ後にこの世界に来るんじゃないかってのもともこの世界にいる、ゲームで言う村人みたいなもんだよ」

立木の疑問に答えたのは青髪が目立つ、性格が明るそうな男だ。

「で、でも、会話は成り立つぞ？」

「この世界に来たばかりのお前じゃあ、俺達との違いは見抜けないだろうな」

「そ、そうか・・・」

そう言い立木が少し考え事していると女の子が話しかけてきた。

「じゃあ本題に入るわよ？アナタ、入隊してくれないかしら？」

「は？入隊って？」

「死んでたまるか戦線によ。まあ部隊名はよく変わるわ。」

「なあ」

「ん？なに？」

「昨日建物の前で銃撃ってたの、お前らなのか？」

「ええそうよ。天使と戦ってたのよ」

「天使？この世界には天使なんているのか？てことは神もいるのか？」

「ええ。この世界では真面目に授業を受けたり、部活に参加したりして普通の学園生活を送ったら神様に消されてしまうの。でも私達は普通じゃない学園生活を送ることで消えないようにしている。普

通じゃない学園生活といえは何かしら立木君？」

「あ？そりゃあ普通の学園生活の真逆だろ？授業を受けなかったり、部活に参加しなかったりとか」

「そうよ。でも神は私達を早く消したいみたいでね、その行いを更正させるための存在をこの世界に置いたのよ」

「それが、天使か・・・」

立木は少しこの世界について理解したがあと一つ気になることがあり、女の子に聞いてみた。

「じゃあ最後に一つ、お前達の目的は？」

そう聞くと女の子は、その質問待ってましたと言つような顔で答える。

「私達の目的は天使を消し去ること、そしてこの世界を手に入れること。でもまだ隊員の数足りないの。だから立木君、入隊してくれないかしら？」

女の子の考えを聞き立木は先程より長い時間をかけて考える。

「・・・わかった、入隊させてもらう」

そう言うのと部屋にいた全員が立木の入隊を喜んだ。

「じゃあ早速自己紹介しなくちゃね。私はゆり、この戦線のリーダーよ。で、さっきアナタにNPCについて説明してくれたのが日向君」

「よろしくな立木」

「よろしく日向」

そう言い日向が手を差し出してきたので立木も手を出し握手する。

「彼は松下君。柔道五段だから敬意をもってみんなは松下五段と呼ぶわ」

そう言つてゆりが手を向けた方向にはがっちりとした体格の男がいた。

「彼が大山君、特徴がないのが特徴よ」

「ようこそ戦線へ」

確かにそこら辺にいそうな小柄な男だな、と心の中で密かに思う立

木。

「ハルバードを持っているのが野田君」

「足引つ張るんじゃないぞ」

「はいはい、引つ張らないよう頑張りますよ」

「なんだその返事は！舐めてんのか！」

「そんなに怒らないの野田君。で、眼鏡をいちいち持ち上げて知的にしているのが高松君。本当は馬鹿よ」

「よろしく」

「ああ、よろしく」

「あと彼が藤巻君」

「藤巻だ、よろしくな新入り」

「よろしく」

「他にもここにいないだけで戦線のメンバーはまだ何十人も校内に潜伏してるわ」

「わかった。そういえば今思ったんだが、どうして俺とお前らの格好は違うんだ？」

「アナタが今着ているのは模範生の制服。私達は戦線メンバーってわかるように模範生の制服からクラス3Sの制服に着替えたのよ」

「クラス3S？」

「そうよ。最初の部隊名は死んだ世界戦線って言ったでしょ？その頭イニシャルを取ったらSSS、つまり3Sだったからクラス3S」

「へえ」

「ちゃんとアナタの分の制服も用意するから安心して。でも用意するのに少し時間がかかるから校内を少し歩いてみたら？ちゃんとどこになにがあるか把握しないと、いざって時に大変なことになるかもしれないしね。藤巻君、大山君、案内お願いできる？」

「任せろゆりっぺ。新入り、俺と大山がしっかり案内してやるから安心しな」

「不甲斐ないかもしれないけどちゃんと案内できるように頑張るか」

「ああ、頼んだ、二人とも」
そして立木は制服ができるまで藤巻と大山の二人に校内の案内をしてもらった。

2 話（後書き）

どうでしたでしょうか？

ここはこうでは？ここをこうしたらいい、などの事があればご報告
お願いします。

3話（前書き）

ほとんどがアニメと同じ台詞です

3話

校内を藤巻と大山に案内してもらった立木はもう制服ができているだろつと言っことで校長室の前まで戻ってきた。立木がそのまま校長室のドアノブに触れようとすると大山が慌てて立木の手を止める。

「あ？なにするんだよ大山」

「合言葉を言わずに開けようとしたらトラップが作動しちゃうんだよ！」

「トラップ？」

「お前も一度かかっただろ？」

そう藤巻に言われ立木は、そういえば確かにここで何かにぶっ飛ばされたなと思い出す。

「じゃあ合言葉はなんなんだ？」

「えーとね、神も仏も天使もなし、だよ」

大山が合言葉を言うところから小さくカチツと音があった。

「へー、確かに安全と言うだけはあるな。これ作っただの誰だよ？」

「野田の馬鹿だよ。あいつ、てめえで作った罠なのに何回もかかってるんだぜ？」

「なんで自分で作ったトラップに自分がかかるんだよ！？馬鹿過ぎだろ！？」

罠が解除された扉を開け、三人は校長室の中に入る。

校長室の中はとても暗く、戦線のメンバーがスクリーンに何かを映して話している。

「あ、大山君、藤巻君、ご苦勞様。立木君、校内の把握ちゃんとしてきた？」

扉が開いたことに気付いたゆりが大山と藤巻を労わった後、立木に話しかける。

「ああ。しかし、この学校はやっぱり広いな。あんなでかい建物がまるまる食堂だなんて驚きだぜ」

「当たり前でしょ。ここは二千人以上の学生が通うマンモス高よ？あれくらいないと困るわ」

「そついうもんか。で、今何してるんだ？」

「今日の戦線のオペレーションを決めたのよ」

「ふーん。決まったのか？」

「ええ、今日のオペレーションは新人勧誘よ」

「新人勧誘？やっぱりまだ人手不足なのか？」

「人手は足りなかったら困るけど多くても困らないでしょ？」

「確かに。だけど俺には未だに人とNPCの区別ができないんだが」

「誰もアナター一人で新人勧誘して来いなんて言っていないでしょ。ちやんと一緒に行く人がいるから」

「誰と一緒に来てくれるんだ？」

「今回は俺だよ」

新人勧誘と一緒にしてくれるのは日向らしい。

「それじゃあオペレーション、スタート！」

雲がほとんど無く、星が綺麗に見える夜。立木と日向は一人も新人を勧誘するどころか一人も見つけることができずにグラウンド付近を歩いていた。

「日向、お前本当にNPCと人との見分けできるのか？」

「当たり前だろ？この世界にいつからいると思ってるんだ？」

「じゃあなんで一人も見つからないんだ？」

「……。お、あんな所にゆりっぺが。おーいゆりっぺー！」

「話をそらしやがった……」

日向が走っていった方向にはゆりと模範生の制服をきた男がいた。しかし日向はゆりにしか気付いていないようにゆりに話しかける。

「新人勧誘の手筈はどうなってんだ？人手が足りねえ今だ、どんな汚い手を使ってでも……あれ？」

日向は少し喋ってから男に気付いたようだ。

「……」

少しの間の沈黙。

その後日向が言ったことのせいか、「俺、向こう行くわ」と言っただけでグラウンドへ行く階段を下っていく。

「うわー！勧誘に失敗したー！」

頭を抱えながら叫ぶゆり。男はNPCではなく人だったようだ。立木はなんで向こう行くわと言っただけで階段を下りていったのか気にな

り、男の行く先を目を凝らして見ると昨日食堂の前で戦線メンバーと戦っていたとても長い銀髪の女の子がいた。

男は女の子に手でこちらをさし何かを言ってるようだ。その後男は怒ったような仕草をすると女の子の手から昨日と同じ刃物が出てきて、男の心臓がある左胸にその刃物で刺した。

男が倒れ女の子が去るのを確認した後、ゆりと日向は倒れている男に向かって走っていった。

立木はそれに付いていくように走る。

立木が男の近くに着くとゆりから「日向君、立木君。彼を保健室に運んで」と言われたので日向が腕を、立木が足を持ち、二人がかりで保健室まで運ぶ。

保健室に着き、男の着ていた血まみれの服を脱がし、ベッドに寝かせた後、立木は聞きたいことがあったのでゆりに聞いてみる。

「なあ、こいつが目覚めるまでどんくらい時間かかるんだ？」

「傷が治るのにそんなに時間はかからないと思うわ、目が覚めるのには一晩かかると思うけど。」

「あとこいつを刺した女の子、あれが天使か？」

「そうだぜ。校則を守らなかつたら最初は口頭注意、直さなかつたら実力行使してくる。ま、俺達が手を出さなかつたら基本手は出してこなけどな」

もう時間的に新人勧誘は無理とゆりは思ったのか、一度対天使用作戦本部（日向に教えてもらった。以降本部）にみんなを集め解散した。

次の日、本部に來ると知らないメンバーがいたので紹介してもらった。

本部の端で「浅はかなり・・・」と言う椎名。

戦線陽動部隊「ガールズデッドモンスター」通称ガルデモのリーダー岩沢。

本名、経歴、何もかも謎な男TK。

立木はTKの謎が氣になったがいつか分かるだろうと頭の隅に置いた。

その後すぐに廊下から叫び声と窓が割れる音がしたので本部の窓から外を見てみると昨日の男が地面に叩きつけられていた。「アレを回収してきて」とゆりに言われたので立木は男を回収するために外に出る。アレ扱いは酷くね？と思ったが口に出さない戦線メンバー。立木が男を回収してきた後ゆりが、

「じゃあ、死んでたまるか戦線に代わる新しい戦線の名前を考えるわよ」

と言ってきた。

「あれ？そんな話したか？」

「そういえば立木君には言ってなかったわね。今戦線の名前は死んでたまるか戦線なんだけど、これもあまり良くないかなと思って変えることにしたの」

「でもそんなポンポン変わって大丈夫なのか？」

「大丈夫だから変えるんでしょ。じゃあ誰か新しい名前ない？」
しばらくの沈黙。

「そうだなあ、じゃあこれはどうだ？死ぬのはお前だ戦線」

そんな沈黙を破って最初に意見を言ってきたのは藤巻だ。

「私が殺されるみたいじゃない」

それにすかさず言い返すゆり。

「いいや、勿論相手はあの女だ」

「じゃあこつちを見なさいよ」

そう言つて藤巻に自分の方向に目を向けさせる。

「死ぬのはお前だ戦線」

「うう！やべえ！確かに俺が殺されそうだわ」

「いやそれはゆりの声と気迫が怖いだけだから！」

「なんか言つた？」

「・・・いい何も」

ゆりが恐ろしい気迫と少しドスの効いた声で藤巻に言つて藤巻が少しゆりから距離を取った後、立木がつつこむと先程より恐ろしい気迫とドスの効いた声でゆりが立木に話しかけ、立木はあまりの恐ろしさに目をそらす。

「他には？なにか案は無いの？」

「これ格好良くね？走馬灯戦線！」

ゆりが促すと日向が意見を言う。

「それ死ぬ寸前じゃない」

「じゃあこれでどうだ？決死隊戦線」

今度は松下が意見を言う。

「死ぬのを覚悟してるじゃない」

「絶体絶命戦線」

今度は岩沢が意見を言う。

「絶体絶命じゃない！」

初めて会った時岩沢さん結構クールな人かなと思ってたのに、と立木は心の中で言う。

「じゃあ無敵艦隊」

そう言うのは大山。

（大山、すでに戦線じゃなくなってるぞ？）

立木の精神ポイント^{ライフ}は余りのダメージに極限にまで擦り切れた。特に椎名の一言がダメージの六割占めている。

「ね、ねえ、もうその人起きてるんじゃない？」

大山の一言でみんなの視線がソファで寝ていた男に向く。

（大山、その心遣いはうれしいが、今はその優しさが俺にとってはきつい・・・）

静かに心の中で涙する立木。

「えっ、ああ！気が付いた？そうだ！コイツにも考えさせてあったのよ。時間はたっぷりあったわ。聞かせていただきましょうか？」

「何を？」

ゆりの言うことに半眼で聞く男。

「死んでたまるか戦線に代わる新しい部隊名よ！」

「勝手にやってる戦線」

男がどうでも良さげに新しい部隊名を言う。

「ほう？ゆりっぺに歯向かうたあい度胸じゃねえか」

その態度に苛ついたのか藤巻がドスを抜刀しそんな雰囲気^{雰囲気}で男に近づく。

「勝手にやってるって言ってたんだよ！！」

「なんだと！」

「なんなんだよお前らは！俺を巻き込むなよ！！俺はとっとと消えるんだ！！」

「消えたい？今ここに存在しているのにですか？」

眼鏡を指で上げながら高松は言う。

「ああそつだよー！！」

「その説明はもうしてるわ」

「抗いもせず消されることを望むと？」

「ああ！」

「抗いもせずミジンコになると？」

「ああ！！は？ミジンコ！？」

高松の突然のミジンコになる宣言に驚く男。

それに乗じて藤巻も言う。

「はっ！魂が人間にだけ宿るとでも思ってたのかよてめえ」

「浅はかなり」

更に乗じて言う椎名。

「次はフジツボかもしれん、ヤドカリかもしれん、フナ虫であるかもしれない」

妙に浜辺の生き物に集中した例えを出す松下。

「はあ！？そんなまさか！！」

ありえないと男は否定する。

「なぜ浜辺に集中しているのかとつつこむ余裕もなさそうな顔ですね。因みに意味なんてありません」

「意味があつたら教えてほしいわ！」

高松の言うことにさりげなくつつこんでいる立木。

「ほつらとつとここからでてけよ、天使の言いなりになって無事成仏するんだろ？フジツボになって人間に食われでもすんだな。幸せな来世じゃねえか」

「フジツボ・・・」

男は何かを考えているようだ。フジツボの容姿でも想像しているのであろう。

「ええー！フジツボって食べられるの！？」

大山は驚いたように言う。

「食用のものもあります」

「知らなかったぜ」

「浅はかなり」

その疑問に真面目に答える高松と顔についた叩かれた後をさすりながら感心する日向、そして「浅はかなり」と言う椎名。

椎名さんは知っていたのだろうか・・・、と思った立木。

「まあまあみんな、そんな追い出すような真似はしないであげなさい、可哀想に」

そうみんなに言うゆり。

「いやそんなことしてるのは藤巻ぐらいだから」

そんなこと自分にしてないと主張する立木。その行動に藤巻は目を見開いた後、睨みながら立木に言う。

「あつ！？なんだよ立木！てめえ人を売るつもりか！？」

「売っては無い。ゆりの誤った見解を正そうと真実を述べただけだ」
「なんだと！？」

「二人とも喧嘩はやめなさい！」

立木と藤巻が喧嘩しそうな雰囲気を出していたのでゆりが仲裁する。
「まったく、この我が・・・あー、えと、今なんだっけ？」

「「フジツボ戦線」」

「そう！この我がフジツボ・・・」

ドカッゲシッ！！

仲良く同時に同じ事を言う立木と藤巻にゆりの拳と蹴りが飛んだ。

「元に戻す！！死んだ世界戦線」

「「いい蹴り（ストレート）だったぜ・・・」」

顔に手形と足形がついた二人はゆりの拳と蹴りを褒める。

それに構わずゆりは男に話の続きをする。

「この戦線の本部にいる間は安全なんだから、彼もそれを知って逃げ込んできたんでしょ」

「いや知らないし。入ろうとした途端吹っ飛ばされたし・・・。て言うか来世があったとして、人間じゃないかもしれないなんて、冗談だろ？」

「冗談ではない」

男は自分が言われたことが否定され、もつともな事を言う。

「だって、そんなの確かめられないじゃないか！誰か見てきたのかよ！？」

「そりゃあ確かめられないわよ。でも仏教では人に生まれ変わるとは限らないと考えられているわ」

「そんな・・・。フジツボだなんて・・・」

フジツボがそんなに嫌なのか、男はありえないと言うような顔で俯

く。

「そんなにフジツボが嫌なら話を聞きなさい！ここが大事よ。私達がかつて生きていた世界では人の死は無差別に無作為に訪れるものだった。だから抗いようもなかった。でもこの世界では違うのよ。天使にさえ抵抗すれば存在し続けられる、抗えるのよ！」

「ちよつと待て、その先になにがあるんだ？お前らは、なにをしたいんだ？」

「私達の目的は天使を消し去ること。そして、この世界を手に入れる！」

「えっ？」

余りにも大きな目標だったからか、男は啞然として顔をしていた。

「まだ来て間もないから混乱するのも無理ないわ。順応性を高めなさい、そしてあるがままを受け止めなさい」

「そして、戦うのか？天使と」

「そうよ、共にね」

そう言つてゆりが手を出す。その手を見て男も手を出そうとする。

これはもう仲間になっただろ、と全員が思つて見ている。

すると突然本部の扉が開き、全員がそちらに向くと野田がいた。

「早まるな！ゆりつぶあああ！！？」

合言葉も言わずに開けたので野田は自分の仕掛けた罠にかかり、窓から落ちていった。

日「アホだ・・・」

藤「自分の仕掛けた罠にはまつてやがる・・・」

男「俺もあなつてたのか・・・」

立「いやー、自分以外だと最高に愉快だな」

「ここに無事に入るには合言葉が必要なのよ。対天使用の作戦本部つて訳。ここ以外に安全に話し合える場所などないわ」

「少し、時間をくれないか」

「ここ以外でならどうぞ」

「くっ！」

ゆりの一言で悩む男。一度ゆりの顔を見て考え、腹を決めたように言う。

「OKだ!」

新しい戦線メンバーに全員が喜ぶ。

「合言葉は?」

「神も仏も天使もなし。私はゆり、この戦線のリーダーよ。彼は日向君、見た目通りちゃんぽらんだけど、やる時にはたまにやるわ」

「ああ、ってフォローになってないぜえ!」

「彼は松下君、柔道五段だから敬意を持ってみんなは松下五段と呼んでるわ」

「無視かよ・・・」

「よろしくな」

「よろしく」

「ふん!」

日向は自分に対する扱いが酷いことにへそを曲げてしまった。

「彼は大山君、特徴が無いのが特徴よ」

「ようこそ戦線へ」

「Come on!! Let's dance!!」

「いや踊らねえけど・・・」

「この人なりの挨拶よ。みんなTKと呼んでるわ。本名は誰も知らない謎な男よ」

「そんなやつが仲間でもいいのか?」

「眼鏡をいちいち持ち上げて知的に話しているのは高松君。本当は馬鹿よ」

「へっ?」

多分頭がいいと思ってたのだろう。立木も最初は冗談だと思っていたが一緒に過ごしていくうちに（とは言ってもまだ入隊して二日目だが）馬鹿だと理解した。

「よろしく」

「あ、ああ」

3話（後書き）

主人公が主人公じゃない気がする
頑張って主人公を主人公にしてみせます

4話（前書き）

次話辺りは色々アニメと内容が変わります。

ユイがでてきたらオリジナルストーリーを書こうと思います。

4話

パーン！パーン！パーン！パーン！

四回の銃声がうるさく本部に響く。

音無は余りのうるさに耳を塞いでいる。立木は入隊してまだ二日しか経ってないがもう銃声には慣れたかのように高松と将棋をしていた。

「はい音無君。初めてでも撃てるわ」

「効くのか？」

「足を狙いなさい。とりあえずは追ってこなくなるわ」

「女の子相手にか？傷はすぐ癒えるのか？」

「そういうのは経験していきながら覚えていきなさい。私達はそうしてきたんだから」

「いいだろう」

「王手だ、高松」

「ま、待つてください！」

「いい返事ね音無君。後立木君は将棋をやめて話を聞きなさい」

音無が返事をするのと部屋の照明が消え、ゆりはスクリーンを用意し、帽子を被り、そこに何かを写して話す。立木は渋々終盤まで来ていた将棋を片付ける。

「音無君、立木君、アナタ達には慣れてもらうためにいつもやっている簡単な作戦に参加してもらっわ」

そして少しの間を置く。

「作戦名、オペレーショントルネードに」

「ええっ！？」

「うっむ、こいつはでかいのがきたな」

作戦名と大山と松下の反応から立木と音無は簡単な作戦と言いつつ簡単じゃないんじゃないかと疑問を抱く。

「いったいどんな作戦なんだ？」

作戦内容が気になり、立木はゆりに聞いてみた。

「生徒から食券を巻き上げる!!」

「その巻き上げるかよ!!」

拳を握りガツチリポーズをとるゆりにつっこむ立木と音無。

「しかもでかくなくねえよ! いじめかよ!」

「音無の言うとおりだぜ!? 武器や頭数ばかり揃えやがつて!」

そう言う二人の首にハルバードの刃の部分が当てられた。

「貴様ら、それはゆりっぺに対する侮辱発言だ、撤回してもらおうか」

「なんでだよ!」

「我らフジツボ絶滅保護戦線は、数や力で一般生徒をおびやかすような真似など決してしない!」

「あれ絶滅するの?」

「いつかはするだろ」

「でも巻き上げるって言っただろうが!」

松下の言う事に反論する音無。

「ええ、文字通り巻き上げるのわ」

そうゆりは言いながらパソコンをいじる。スクリーンには大食堂の全体図がうつり、様々な場所に戦線メンバーの名前がある。

「いい? アナタ達は天使の進行を阻止するバリケード班。作戦ポイントである食堂を取り囲むようにそれぞれ指定のポイントで武装待機。安心しなさい、楽な所に置いてあげる。細かい位置は後で高松君が大山君に確認して。岩沢さん、今日も期待してるわ」

「ああ」

短く答える岩沢。

「天使が現れたら各自発砲、それが増援要請の合図になるわ。どこかで銃声が聞こえたらアナタ達も駆けつけるように。作戦開始時刻は18:30。オペレーション、スタート!」

立木と音無は天使が来ない可能性が一番低いと思われる第二連絡橋にいる。

辺りは月が雲に隠れているのでとても暗い状態だ。

「そういえば立木は俺より先にこの世界に來たんだよね？」

そう音無が座って銃の手入れをしている立木に話かける。

「とは言っても二日しか変わらねえけどな」

「銃の扱いとかにはもう慣れたのか？」

「ああ。天使に対抗するために猛練習したからな」

そう言いながら立木は組み立て終わった二丁の拳銃を構える。しかし二丁と同じタイプの拳銃ではなく、片方は自動式、オートマチック片方はリボルバータイプとバラバラなのだ。

「なんで種類がバラバラなんだ？」

「なんかこの組み合わせが格好良く見えたからだよ」

「そうか？同じタイプの銃を二つ持ったほうが格好良いような気がするんだが・・・」

「いいじゃんいいじゃん。人の趣味にケチつけるなよ」

そんな会話をしていると雲に隠れていた月が顔を現し、辺りを明るくする。

二人は連絡橋の向こうを見ると月の光を受け、とても綺麗に輝く長

い銀髪の女の子、天使が立っていたのに気付いた。

「こつちに現れやがった・・・」

「幸先悪いなこりゃ」

そう二人は言いながら銃を天使に向ける。

「音無、手本見せてやるからちゃんと見てろよ」

そう言い立木は天使の両腿に発砲する。天使は両腿を撃たれて前のめりになり、その場で倒れた。

「な!？」

突然の事に驚いたのだろう、音無は目を見開きながら立木を見る。

「おー、当たった当たった。やっぱ猛練習した甲斐があつたな」

「お前分かつてんのか!?人を撃つたんだぞ!?なんでそんな事言えるんだよ!？」

「撃つた、と言つても腿じゃんか。それに、この世界では死ぬ事ないんだから心臓に当たつても別に構わないんだよ」

「でも!？」

「それに、お前はあいつに一度殺されてるんだぞ?なんでそんなに躊躇する?」

「ガードスキル、ハンドソニック」

天使が小さな声で何か言ったのが聞こえた。

天使を見ると天使は両腿撃たれたはずなのに立っており、手には昨日音無を刺したのと同じ形の剣が生えていた。

「仕方ねえ、もう一回撃つてみますか!！」

立木はリボルバータイプの銃だけを天使の心臓に向けて発砲したが天使の手から生えている剣で弾かれた。

「はあ!?!マジかよ!?!どんだけ動体視力がいいんだよ!?!」

そう言い立木は食堂に向かってダッシュする。

「立木!?!何撃つた本人が逃げてんだよ!?!」

音無も立木の後を走って追う。

「だってあんな危険な物手から出してんだよ!?!しかも銃弾を弾くんだよ!?!対抗してたら昨日のお前みたいに心臓一突きにされるわ

「！！」

「だからって逃げるなよ！？俺らはバリケード班だぞ！？それにここじゃ死なないってさっき自分で言ってたじゃねえか！！」

「死ななくても痛みはあるじゃねえか！！それに俺目標があるんだ！！」

「今と関係あるか知らないが一応聞いておこう。それは何だ？」

「この世界で最も死んだ回数が少ない男になるんだああああ！！」

「いやそれ戦線メンバーとしている限り無理だと思うぞ！？」

「つか何が『安心しなさい。楽な所に置いてあげる』だよ！！なんで楽な所に天使が出てくるんだよ！？訳分からねえよ！！」

そうこう言っているうちに大食堂の前に着く立木と音無。

走ってきた方向を見るとちょうど天使が階段を上がってきていたところだった。

天使が階段を上がりきると同時に後ろから天使に向かってハルバードが飛んできた。

銃弾すら弾くことができる天使は軽々とハルバードを上弾く。

「ちっ、外したか！」

「待たせたな！」

「一番弱え所狙われたんじゃねえか？」

「まだハンドソニックだけだよ」

次々と戦線メンバーが集まり、天使に銃口を向ける。

「ガードスキル、デイスターション」

天使がそう言うのと風が吹いたかのように天使の髪が揺らめく。

「撃てえ！！」

日向の声を皮切りに戦線メンバー全員が天使に発砲する。

しかし銃弾は天使に一つも当たらず、回りに受け流されている。

「糞！！」

「遅かったか」

「ちっ！これだから銃は！！」

「仕方ない、当たらなくても撃ち続けるぞ！！」

当たらなくても足止めのために撃ち続ける戦線メンバー。

松下がバズーカを用意していると椎名が大食堂の上から軽やかに降りてきて天使に苦無を投げた。

天使がその苦無を弾いたのと同時に松下はバズーカを撃つ。

バズーカの弾は天使の足元で爆発した。しかし煙が晴れるとそこには少しの傷を負っただけで済んだ天使が立っていた。

「化物かよ・・・」

立木は目の前の光景にそう呟いたのと同時に空から白い何かが降ってきた。

その一枚を手にとって見るとオムライスと書いてある食券だった。

「二人ともそれでいいのか？行くぞ！」

食券を手にとり立木と音無は日向に引つ張られ大食堂の中に入っていく。

「はいよ、オムライスお待ち」

立木はおばちゃんからオムライスを受け取り、戦線メンバーが座る席に移動する。

しかし空いている大山の席が音無に座られたので立木は見知らぬ薄紫色の女の子の隣に座ると女の子に話しかけられた。

「あつ、初めて見る人だね。名前は？いつ来たの？」

「立木だ。二日前にこの世界に来た」

「私の名前は入江、よろしくね立木君」

その後立木は入江に同じ席に座っていたガルドメンバー全員の紹介をもらった。

（俺、陽動部隊に入りたいなあ・・・）

そう心の中で立木は思った。

4 話（後書き）

入江と関根のキャラが分からない作者です。
誰か教えてください！！

5話（前書き）

最後が少し納得できない出来になってしまいました。

5話

場所は本部。暗くなつた部屋で戦線メンバーが集まって会議をしている。

「高松君、報告お願い」

そうゆりが高松に言う。

「はい、武器庫からの報告によると弾薬の備蓄がそろそろ尽きるようです。次一戦交える前には、補充しておく必要があります」

「新入りも入った事だし、新しい銃もいるんじゃないの？」

高松の報告の後に大山がゆりに言う。

「そうね、分かったわ。本日のオペレーションは、ギルド降下作戦といきましょう」

降下の部分を聞いて音無は体を抱き震えた。多分空からの降下を想像したのだろう。それを不思議に思つたのか日向が音無に話しかける。

「どうした音無？」

「高いのは得意じゃないつつか・・・」

「何言つてるのよ、空から降下じゃないわ。ここから地下に降下よ、そうゆりが音無に言う。

「なんだ、地下かぁ。って地下ぁ!？」

ゆりの言つた事に安心したがすぐ驚く音無。

「私達はギルドと呼んでる地下の奥深くよ。そこでは仲間達が武器を作ってるの」

「じゃあ、天使にばれないようにってことか？」

「そうね。ギルドを抑えられたら武器支援が無くなり、私達の勝ち目は無くなるわ」

ゆりがパソコンのキーを押すとどこかに電話しているような音が鳴り、誰か出たと思つたらそっちに行くただけ伝え切つた。

「今回はこのメンバーで行きましょう」

「あれ？ねえ、野田君はいいの？」

今部屋の中にいるのはゆり、日向、藤巻、松下、大山、高松、TK、椎名、音無、立木の十人。ゆり好きの野田がいないのだ。

「あの馬鹿、どうせまた単独行動してるんだろ」

日向が気にするなと言って本部の端で立ちながら寝ていた立木を叩き起こした。

向かった先は体育館。何故か松下、高松、TKの三人が椅子などを収納してある場所を引っ張りだした。

「おうし、行くか」

藤巻が言々と戦線メンバーが収納してあった場所に潜って行く。

そこには地下へ行くための梯子があり、全員それで地下に降りていく。

「ギルド連絡通路 B1」

「ギルドに入るの久しぶりだね」

「おい！誰がいるぜ！！」

大山がそう言った後藤巻がみんなに言う。

ライトを暗い通路に向けるとハルバードを持って格好付けてる野田がいた。

「うわー、野田^{ほか}がいた」

日向がみんなを代表して言った。

「音無とか言ったか？俺はお前をまだ認めていない」

ハルバードを音無に向けながら野田は言う。

「わざわざこんな所で待ち構えてる意味がわかんないよな」

「野田君はシチュエーションを重要視するみたいだよ」

「意味不明ね」

あきれたように日向が言うとお山がフォロー？をする。しかしそのフォロー？を聞いてもやはり意味不明の一言で切り捨てた。

「別に認められたくもない」

「貴様、今度は千回死なせてがはああ！！？」

喋りながら音無に近づく野田は横から来た巨大ハンマーで吹っ飛んだ。

「！！？臨戦態勢！！」

突然の事にゆりは一瞬驚いたがすぐに戦線メンバーに指示を出す。

「トラップが解除されてねえのか！？」

「トラップを解除するように言ったんじゃないのか？」

立木は腰から二丁の拳銃を出してゆりに聞く。

「ギルドの独断でトラップが再起動されたのよ」

「どうして？」

「答えは一つしかない、天使が現れたのよ」

「この中にか！？」

ゆりの言う事に戦線メンバーはざわめく。

「ギルドの連中は俺達がいるのを知っててこんな真似をするのか？」

「あなたはまだわかっていないようですね」

高松は音無に眼鏡を指で上げながら説明する。

「何があるかと私達は死ぬわけじゃない。死ぬ痛みは味わいますが」

「それが嫌なんだが・・・」

「しかしギルドの所在がばれ陥落すれば、銃弾の補充も壊れた武器の補填もきかなくなる。それでどうやって天使と戦うと言うのです？」

「ギルドの判断は正しい」

「天使を追うか？」

日向がゆりに提案する。

「トラップが解除されてねえ中をかよ！」

藤巻が日向に言う。

「天使はそのトラップで何とかなるだろ？戻ろうぜ？」

今度は音無がゆりに提案する。

「トラップはあくまで一時的な足止めに過ぎないわ」

ゆりは音無の提案を却下し、日向の意見を取り入れた。

「追っわ、進軍よ！」

「ギルド連絡通路 B3」

ゆりが先頭で畏がないかどうか確かめつつ前に進み、その後を戦線メンバーは歩く。

「ふあゝ、眠い」

「この状況でそんな事言えるお前が羨ましいぜ」

暇過ぎた立木は欠伸をし、藤巻が皮肉を込めて立木に言う。

すると突然椎名が「まずい！来るぞ！」と言う。みんなが後ろを向くと巨大な鉄球が落ちてきてこちらに向かって来た。

「走れ！！」

椎名の一言に全員従い走る。立木が本気で走ると椎名と並走出切るほど早く走っていた。

（なんでこんなに早く走れるんだ？俺って一体なにをしてたんだ？）

立木は今の状態を思い出し考えるのをやめて走るのに専念する。

すると通路の途中に曲がり角があり、そこに立木と椎名は入り、みんなを呼ぶ。

戦線メンバーのほとんどが曲がり角に入ったが日向、音無、高松がまだ来ない。

日向は間に合わないと思ったのか音無を掴み、通路の端に寝転び鉄球をやりすごした。

しかし高松は曲がり角に入る前に転んでしまい、曲がり角に入らずそのままずっと走っていつてしまった。

しばらくすると高松の叫び声が通路の奥から聞こえてきた。

「高松君以外は無事みたいね。行きましょ」

「高松・・・なむ」

立木は一人心中で高松にむけて黙祷をした。

〈ギルド連絡通路 B6〉

「開く？」

着いた所は閉ざされた部屋だった。そして藤巻が閉まっているドアを開けようとしている。

「もち、無理だぜ」

「そこまで自信満々に答えるなよ・・・」

藤巻の答えに立木がつっこむ。

大山、松下が部屋の中に入ってくると入り口が閉まった。

「うわああ！！しまった忘れてたよ！！ここは閉じ込められるトラップだった！！」

「そんな大事な事忘れるなよ！！」

「しまった閉まってしまった・・・なんてどう？」

「浅はかなり」

大山の言う事に音無がつっこみ、立木は下らない親父ギャグを思いつき、椎名は大山と立木のどちらにも「浅はかなり」宣言をする。突然部屋が明るくなり全員驚く。

ゆりはここのトラップの内容を覚えているのか「しゃがんで！！」と指示を出し、全員がしゃがんだ頭の上をなにかが通過した。

椎名が懐から玉を出し、地面にぶつける。その玉は煙玉だったようで、部屋に煙が充満した。

しゃがんだまま顔を上げ、上を見みるとそこには赤い光の線が一本見える。

「当たるとどうなの？あれ」
音無が日向に聞く。

「最高の切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるぜ」
そう日向が答えるとレーザーの数が二本に増える。

「第二射くるぞー！！」

「どうすればいいんだよ！？」

「くぐるのよ!!」

全員が頭を下げてやりすごす。

「第三射なんだっけ!？」

「Xだ!!」

「あんなのどうすればいいんだよ!？」

「それぞれなんとかしなさい!!」

「そういえば立木はどうしたんだ!？さっきから声が聞こえねえが!!」

「ここだよ」

藤巻が立木の声が聞こえない事に疑問を抱きみんなに聞いてみると上から立木の声が聞こえてきた。

全員上を見ると立木が手と足と壁と壁との間を利用して天井近くにいた。

「・・・第三射来るぞ!!」

「あれ?無視?」

立木はある意味野田に並ぶ馬鹿だと藤巻は思った。

戦線メンバーのほとんどがぐりぬけていく中、最後の松下が大きな体格のせいでよけきれずレーザーの餌食になってしまった。大山はその瞬間を間近で見えてしまい体を震わせている。

「開いたぞ!急げ!!」

藤巻がどうにかして閉まっていた出口を開けた。

戦線メンバーは我先にと言うばかりにその部屋から出てくる。

立木は一回天井近くから下りてレーザーに注意しつつ歩いて出てきた。

「う、うげええ!!」

さっき見たもののせいで大山は地面に胃の中の物を出す。

「大丈夫か?」

立木はそんな大山を心配して背中をさする。

「今度の犠牲は松下君かぁ。あの体じゃあしょうがないわね」

「少しはダイエットしろってもんだ」

仕方ないと言うゆりと毒を吐く藤巻が対称的に見えるなあ、と立木は思った。

日向の話によると切り刻まれてもしばらくすれば元に戻るらしい。

「・・・しばらくここに残ってていいか？」

「却下」

（ギルド連絡通路 B8）

「二人、減っちまったな」

「けっ！なんでお前みたいなやつが残ってるのか不思議だぜ」

戦線メンバーが歩いていけると上から砂が落ちてきた。

上を見ると天井が少しづつ加速しながら落ちていく。

「トラップが発動してるわ！」

「ああしまった！！忘れてたよ！！ここは天井が落ちてくるトラップだった！！」

「だからそんな大事な事忘れるなよ！！」

全員が潰れると思ったそのとき、天井が途中で止まった。

「「「「「TK！！」」」」」

ありえない事にTKが落ちてきた天井を一人で支えているのだ。

「Hurry up！！今なら間に合う！！」

「ありがとう」

「じゃあな」

「達者でな」

「また会おう」

ゆり、藤巻、日向、立木が一言づつ残していく。

「・・・」

音無は少し自分が言う言葉を考える。

「・・・ソーリー」

音無がTKに言って抜け出すと同時に天井が完全に地面まで落ちた。

「TKまで、犠牲に・・・」

「したんだろ、お前らが」

「いやだから、大丈夫だって」

「犠牲を無駄にしないように前に進むわよ」

「ギルド連絡通路 B9」

「次のトラップ、案外床が抜けるやつだったりして」

「んなわけねえだろ。そうだったとしても、どうやって一度作動したトラップを直すんだ？」

「・・・直さず使い捨て？」

そんな風に藤巻と話していると戦線メンバーは広い通路にでた。ひびがはいっている床だらけで、人が立つただけでも崩れそうだ。

「「・・・」」

崩れそうな床を見て立木と藤巻は行きたくねえと思ってしまったが、床を見ていないゆり達はさつとその上を歩いていく。ゆり、日向、椎名、大山、音無が乗っても床は壊れなかったから二人は思い過ぎしかと思う。

「ま、そんなトラップあるはずねえか」

「そ、そうだな。ただの思い過ごしだよな」

二人がそう言つて床に乗つてみんなの所へ向かう途中、床は乗っている全員の体重を支えきれず音をたてて壊れた。

「しまったー！ー！忘れてたよー！ー！ここはー！ー！ー！・・・」

大山は藤巻のドスと共に落ちていき、大山以外の全員は近かつたため、人間梯子状態になって助かった。人間梯子は上から順に椎名、藤巻、立木、ゆり、日向、音無となっている。

「だ、だから！忘れるなよー！ー！」
落ちていく大山につっこむ音無。

「重すぎて、もたない！ー！」

ゆりがそう言うのも無理は無い。ゆりの下には日向と音無の二人がいるため、ゆりの腕にはざつと見積もつて100kg以上の力がかかっている。いつ落ちてもおかしくないのだ。

「俺と音無も落ちるか？」

「ちよつと待て！勝手に決めるな！ー！」

自分の生死？を決められそうになって慌てる音無。

「ここで一気に戦力を失うのは得策ではない！ー！」

「うわっ！？俺椎名が浅はかなり以外言うの初めて聞いた！ー！」

「今そんなどうでもいい事にすんな！ー落ちてえのか！？」

「すみません・・・」

そんな話を話していると音無が立木の肩につかまり上に上がっている。

「ふう、あと二人の辛抱「いやあああ！ー！そんな所持てるはずないでしょ！ー！」「うわ！うわあああ！ー！馬鹿ああああ・・・」
・・・一人の辛抱だな」

その後ゆりが立木を伝つて上がり、立木も藤巻も無事に安全な床に上がった。

「えーと、日向のやつは・・・」

そう音無がゆりに聞くと「尊い犠牲となつたわ」と即答。音無もそ

の返答に「そ、そうか」しか言えなかった。

「よくもまあ、新人のてめえらが生き残れたもんだな」

「まあな」

「偶々だよ、偶々」

「次はてめえらのどちらかの番だぜ。俺的には立木になってほしいが」

「次は藤巻の番だ、間違いない」

「なんで根拠なくそんな自信が持てるんだよ!？」

音無のつつこみに立木は一文字で、自身の自信の源を言った。
「勘」

「ギルド連絡通路 B13」

ゆり、藤巻、音無、立木は密閉された空間で水責めにあっており、藤巻はカナヅチだったせいで最初に溺れた。

「やっぱ俺の予想通り藤巻だったな」

「何言ってるんだよ!？お前自分のした事覚えてるか!？」

「あ？なんかしたっけ？」

回想

ここからは音声のみでお楽しみください。

「ぶはっ!!溺れる!!溺れる!!」

「はははは！なんだあ？藤巻カナヅチなのか？やっぱり俺の勘は当たるな！いつておい！何人様の服を掴んでやがる！？この！！」
「てめえ！！助けてくれたっていいじゃねえかよ！？」
「さつき『次はてめえらのどちらかの番だぜ。俺的には立木になってほしいが』とか言ってたじゃねえか！！」
「さっきのことは水に流せ！！」
「てめえはここで沈め！！おらあ！！！！」
「ぐはっ！！た、立木、後で覚えとブクブクブク・・・」

回想終了

「・・・・・・わりい、まったく思い出せねえ。俺、水責めでまた記憶喪失になったかも・・・」
「絶対なつてねえよ！？そんな的確に一部分が記憶喪失になつたら逆に驚くわ！！」
「出口はこつちだ、来い！」
音無のつつこみを聞いた後、椎名が見つけた抜け道を通って三人は密室から脱出する。

（ギルド連絡通路 B15）
出てきた所はとても広い場所だった。奥から大量の水が流れてきてその水が滝のように断崖に落ちていく。
「どんくらい地下に潜ったんだろうな・・・」

「さあ、もう数えてねえよ・・・」

「ゆり、こつちだ!」

「椎名さん?」

いつの間にか向こう岸に椎名がいた。ゆりは音無と立木と共に椎名がいる向こう岸に行こうとすると川の上流から子犬が入っているダンボールが流れてきた。

「ん?なんであんなものが?」

「あ、あれは!?!」

「どうしたゆり?」

ゆりがしまったと言うような反応をしたので立木が理由を聞こうとすると向こう岸にいた椎名がその子犬に向かってダッシュしているのが見えた。

「ああー!!子犬が流されているー!!!!」

そう言つて椎名は子犬に向かってジャンプした。

「ええー!!?」

「椎名さん駄目えええ!!」

立木と音無は椎名のギャップに驚き、ゆりは引きとめようと叫ぶ。

椎名はそのまま川に着水し、子犬を無事を確かめる。しかし背中にぜんまいがあることに椎名は目を見開く。

「不覚!!ぬいぐるみだったー!!!!」

椎名はそのまま子犬のぬいぐるみを抱いて落ちていった。

「くっ!椎名さんまでもトラップの犠牲に・・・」

「あれも天使用トラップかよ!?!つか一目で気付けよ・・・」

「かわいい物好きしかかからねえよ。もう対天使用トラップじゃなくて対(極度の)かわいい物好きトラップだよ」

「ギルド連絡通路 B17」

点々と点いている明かりを頼りに三人は薄暗い通路を進む。

「残ったのはアナタ達だけね・・・」

「そうみたいだな」

「自爆が二人くらいいた気がするがな」

ドン！

突然ゆりが手を壁にぶつける。

「本当の軍隊なら、みんな死んで全滅じゃない。酷いリーダーね・・・」

音無は顎に手を置き少し考えた後、立木に目を合わせる。立木も意味が分かったのか頷く。

「仕方ないだろ？対天使用のトラップだ。これぐらいじゃないと意味ねえよ」

「そうそう。逆に全員がここに残ってたら対天使用のトラップとしてどうなんだって疑問を持つぜ」

そう二人でフォローしてもゆりは何も言わずただ顔を俯かせている。

「ちよつと休んでいかないか？」

音無がそう提案すると「そうね・・・服も乾かしたいし」とゆりは言い、三人は休憩する事にした。

「あんな連中をよく統率してられるな。どうしてあんながリーダーに選ばれたんだ？」

「初めに歯向かったから。それだけの理由よ」

「いやいやそれだけって言うてるがそんな事最初にするなんてなかなか出来ないもんだぜ？」

「そうでもないわ。私には許せない事があったから、歯向かっただけ」

「どんな事だよ？」

「・・・兄弟がいたのよ」

「「えっ？」」

「アナタ達にはない記憶の話よ」

「この世界に来る前の、生きていたときの話か？」

「そう・・・」

そこから立木と音無はゆりの死ぬ前の話を聞く。

ゆりは四人姉弟の長女だと言うこと、両親の仕事が上手くいき裕福だったこと、夏休みの午後に強盗が押しかけてきたこと、強盗達が金目の物が見つからず妹弟達を人質にとり、十分おきに金目の物を持ってこないと一人ずつ殺していくと言われたこと、そして警察が来たのが三十分後の妹弟達全員が殺された後だったこと。

「「・・・・・・・・」」

ゆりの過去の話があまりにも悲しく、理不尽な話だったため、立木と音無は言葉を失う。

「別にミジンコになっただって構いわしないわ。私は本当に神がいるのなら立ち向かいたいだけよ・・・。だって、理不尽過ぎるじゃない。悪い事なんてなにもしていないのに。あの日までは、りっぱなお姉ちゃんであいられた自信もあったのに。守りたい全てを三十分で奪われた・・・。そんな理不尽でないじゃない・・・。そんな人生なんて、許せないじゃない」

「強いな、ゆりは」

「えっ？」

「俺の記憶がそんなのだったら、とっとと消えてしまいたくなるかもしれない」

「俺も絶対そうだな」

「でも、ゆりは抗うんだな」

「そうよ」

「なあ、一つだけ聞いていいか？」

「何？」

「ゆりは、どうして死んだんだ？」

「馬鹿ね！自殺なんかじゃないわよ！自殺した人間が抗うわけない

じゃない！それにこの世界に自殺した人間はいないわよ。行くわよ」
そう言つてゆりはギルドに向かって歩き出す。
（じゃあ俺は、どんな死に方をしたんだろう・・・）
ゆりの「この世界には自殺した人間はいない」と言う言葉を聞いて
自分の死因が気になつた立木だった。

「あれがギルドの入り口か？」

「ええ、そうよ」

「俺は外で天使が来るか見張つてるわ」

「えっ？どうしてだ？」

「なんとなくだよ、なんとなく。深い理由なんてねえよ」

「そう。じゃあ立木君、見張りよろしくね」

ゆりは立木をおいて音無と共にギルドへの梯子を降りていった。

「さて、しばらく暇になるだろうし銃弾の補充やらなんやらやつと
きますか」

そう立木は言い3Sの制服を脱ぎ、地面に広げる。

次に両方の靴を脱ぎ、右の靴の底を取り外し自動式拳銃のマガジンを、左の靴の底を取り外しリボルバータイプの銃弾を取り出し制服の上に置く。今度は腰のベルトの後ろにあるポーチから銃身と小さな部品を取り出し、それらも制服の上に置く。そして全ての部品を使つて銃を組み立てていく。

「なかなか良い出来なんじゃね？」

出来た銃、音無が持っているのと同じグロック17を眺めながら立木は言う。

銃も出来たから制服を着ようとするのと地鳴りと共に少し地面が震えた。

「なんだ？天使がトラップにかかってんのか？」

立木が呟くとまた地鳴りと地震がくる。先程より音も地面の震えも大きくなっていて近づいているのがわかる。

ギルドの入り口からカンカンと誰かが上ってくるのが聞こえてきた。立木がギルドの入り口を見るとゆりが出てきた。

「おう、お帰り。天使の足止めを手伝いにきたのか？」

「ええ。天使は？」

「まだだ。だが、トラップにかかりつつも確実にこっちに来ている」「そう。あら、音無君も来たの？」

音無も天使の足止めに手伝いに来たようだ。

「ああ。下にいてもなにもすることがないからな」

「来たようだぜ」

立木が銃で指した方向にはほぼ無傷の天使がいた。

「行くわよ！音無君、立木君！」

ゆりの発砲を合図に立木と音無も発砲する。

誰が撃った弾か分からないが一発天使の左腿に当たった。

「ガードスキル、デイストーション」

しかしその後は天使に当たる弾が全て周りに弾かれる。

「仕方ねえ。ゆり！少しでも俺に時間をくれ！」

「えっ！？どうして！？」

「いや、前のトルネードの時にも天使は銃弾を弾くやつを展開してたんだだけださ、そんな時に椎名が投げた苦無だけは剣で弾いてたんだ。だからもしかしたら銃弾しか弾けない、接近戦では使えないやつかもしれないんだ！」

「へえ、中々の洞察力ね。分かったわ。音無君、私がカウントするからゼロになったら撃つのをやめて」

「了解！」

「行くわよ、カウントスリー！」

カウントが始まると立木は残っている弾の数を気にしなくなったかのように撃ちまくる。最初に使っていたリボルバータイプの弾が切れたため腰のポーチに入れ、さっき作ったグロック17を使う。

「カウントツー！」

立木の残っている弾の数はグロック17は六発、自動式拳銃は四発の合わせて十発になった。

「カウントワン！」

カウントが残り一になったので立木は二丁の銃をポーチに入れ、ベルトに挿してある刃渡り二十cmはあるナイフを出す。

「カウントゼロ！」

ゆりのカウントがゼロになるとゆりと音無の発砲が止まる。そしてそれと同時に立木は天使に向かって走る。

立木が天使の心臓にナイフを突きたてようとするとう天使は体を捻って避けた。

（ビンゴ！やっぱり接近戦では意味がねえみてえだ！）

次は縦にナイフを大きく振る。これには簡単に反応できたようで手から生えている剣で受け止められる。

「懐がから空きだぜええええ！！！」

そう立木は言いながら天使の腹に強烈な蹴りを入れる。

天使はその一撃で遠くに飛んでいく。

そのすぐ後に警報らしきものがジリリりと鳴った。

後ろを振り返るとギルドから大きな大砲が現れた。

「な、なんだ！？」

「総員退避ーーーー！！！」

「どこにーーーー！！？」

高校生に見えないおっちゃんに立木は聞くがおっちゃんは聞こえていないようでそのまま横穴に入っていく。

「あ！？あんな所にあんな場所があったのか！？俺もさっさと入ら

ないと!!」

「撃て――!!!!」

「ちょ!!? 待って――!!!!」

誰かの合図と共に大砲が爆発した。

5 話（後書き）

この後主人公は音無にいない事に気付いてもらい、ちゃんと地上に運ばれました。

番外編 王様ゲーム（前書き）

番外編書いてみました。

一応立木主観で書いてみました。

誤字、脱字があるかもしれません。

番外編 王様ゲーム

ゆりから本部に来いと言われ来るとゆり以外に音無、日向、高松、松下、大山、TK、野田、藤巻、ユイ、遊佐と大勢が来ていた。

「なあゆり、一体こんだけ呼んでなにをするんだ？」

「今日は暇潰しに王様ゲームをやるわよ！」

「あ？なんで？」

「なんで王様ゲームなんだ？」

音無が皆の代表としてゆりに聞いてくれた。

「なんでって、なんとなくよ」

ゆりはそう言いながら戦線メンバーの人数分の割り箸の入った缶を出す。

「じゃあルールを説明するわよ。遊佐、お願い」

「了解しました」

「お前がするんじゃないのかよ！！」

「では王様ゲームの説明します」

「遊佐、俺のつつこみを無視して先進めないでくれ・・・」

そう俺が言っても遊佐は無視して王様ゲームの説明を続ける。

「まずここに人数分の割り箸があります。この割り箸には1から1の番号が書かれた物と王様と書かれた物があります。この書かれた部分を下にして缶に入れて混ぜます。そして全員が一斉にこの割り箸を誰にも見られないように引き抜きます。王様の割り箸を引いた人は自分が王様だと公言してもらいます。その後好きな番号を言い、その人に何でも一つ命令をします。番号を言われた人は命令を聞くまで出来る限り反応を出さないようにしてください。命令が出た後その番号の人は命令を必ず実行してください」

「質問してもよろしいですか？」

高松が眼鏡を一度指で上げ、遊佐に聞いた。なんで毎回眼鏡を指で上げるんだ？

「なんでしょうか？」

「王様が一度に命令できる人数の制限は？」

「何人でもオッケーよ」

遊佐の代わりにゆりが答えちゃった。

「じゃあ俺からも。出来る限り反応を見せないようにって言うんだけどわざと反応するのはありか？」

「構いません。その反応で王様が命令を変えるかどうかは分かりませんが」

俺の質問に今度は遊佐が答える。よっし！！これで場を乱しまくれる！！

「それじゃあ王様ゲーム、スタート！！」

全員が一斉に机の上の缶から割り箸を引く。

さて、一番最初の王様は誰だ？

「あつ、僕からみたいだね」

最初は大山か……。さてどんな命令か。

「じゃあ三番の人は……」

3番か、俺は8番だから関係無いな。

「グラウンド五周してきてください」

「ちえ、俺からかよ」

どうやら日向が3番だったらしい。番号を言われても顔色一つ変えてなかったから気が付かなかった。

「じゃあ、日向君が帰るまで一本抜いておきましょう」

11番の割り箸を抜いて次が始まる。

全員険しい顔で自分の割り箸に書かれている番号を見る。

「次は俺みてえだな」

藤巻が王様と書かれた割り箸を振りながら言う。

や、やばい！！ここでもし俺の番号が当てられて下手な反応見せたら『ギルドにある対天使用即死トラップ全部受けて来い』とか残酷非道な命令が来るかもしれない！！

「そんじゃあ、5番が9番の頭に本気の回し蹴りにしとくか」

相手が俺じゃなくても十分残酷非道な命令が来たーーーー！！！！！！
「えええ！？僕が受ける側なの！？」

どうやら9番は大山だったらしい。因果応報にしては随分大きな応報だな、可哀想に。しかしまだ蹴る相手によって救いが

「俺のようだな」

なかったーーーー！！！！

5番の割り箸を野田は大山に見せつけながら言う。

「お、お手柔らかに・・・」

「王様の命令は絶対だからな」

「そ、そんなあゝ」

野田は少し大山から離れ、助走をつけて本気の回し蹴りを大山の頭にぶつける。

威力があり過ぎたせいか、大山は本部の窓から外にすごい勢いで吹っ飛ばされていった。

「うわああああああ・・・」

大山の声がドップラー効果で低く、そして小さくなっていき、やがて聞こえなくなった。

「最初の脱落者は大山君か」

「ちよつと待てえええ！！」

「なにかしら立木君？」

「これは流石に危険すぎる！？」

「私達はこの世界で死なないのよ？別に少しくらい危険な王様ゲームだっていいじゃない。生きてたら出来ないわよ？それに遊佐は説明したわよね？なんでも一つ命令できるって」

そ、そんな馬鹿な！？そんな危険な事までありなんて知ったら参加しねえぞ！？くそ！！はめられたか！！

「因みに途中退場は無しだから。退場できる方法は王様の命令によって再起不能になった時だけよ」

な、んだと！？退路を絶たれた！！くそ！！死ぬかゲームをし続けるかの二択しか選択肢がないなんて！！悪魔のゲームだ！！どうすれば、どうすれば生き残れる！？

番外編 王様ゲーム（後書き）

続く!!

多分、きっと、メイビー・・・

初めての遊佐登場が番外編でどうよ?と思います
本編でも出るよう頑張ります

6話（前書き）

途中で区切ります。

6話

本部では死んだ世界戦線所属、陽動部隊「ガールズデッドモンスター」に新しいメンバーを入れたらどうかという話をしていた。今まで岩沢一人にボーカルとリズムギター、作詞作曲も任せているのでメンバーを一人増やして岩沢の負担を軽くしようと言う意見があったからだ。

「こいつがガルデモのボーカルにだと？」

「ありえねえ」

そうして候補が一人出てきたのだが見た目がロックバンドに合わないピンクの髪を持った女の子だったため、野田がふざけてるのか？という口調で、藤巻が馬鹿か？と言う口調で言う。

「ユイって言います！よろしくお願いしまっす！」

ユイは顔の前で横ピースをしながら言う。

「誰こいつ？」

今までうわの空だった日向が音無に尋ねる。

「お前聞いてなかったのか？ガルデモの新メンバー候補だよ」

「いいですか？ガールズデッドモンスターはロックバンドですよ？」

「アイドルユニットにでもするつもりか？」

「ちゃんと歌えますから！どうか聞いてから判断してください！」

そう言いユイは本部に機材を運び入れて歌う準備をする。

しかしユイは女の子のため、持てない物もあり、それらは全部戦線メンバーが入れていた。

「形だけは様になってんなあ」

「なんか不幸な事が起きそうな気がするぜ」

立木の不幸リーダーがユイの不幸を予言した。

機材の準備も終わり、ユイは音楽を流し歌い始める。

「いえーい！！みんな、今日は来てくれてありがとう！！」

歌い終わってテンションは上がったユイはその場で一回回ってマイクスタンドを蹴り上げた。するとマイクスタンドは天井に突き刺さった。マイクスタンドを持って回っていたので足元のコードが輪が出来ており、その輪がユイの首に引っかかり首を吊った状態になってしまった。

「何かのパフォーマンスですか？」

「デスメタルだったのか」

「crazy baby」

「し、死ぬ・・・」

「いや、事故のようだぜ？」

「はははは！最高に笑えるぜ！」

その喜劇にそれぞれ感想を言う。

そのままは可哀想と言うことで背の高い松下とTKが天井に刺さったマイクスタンドを抜く。

「げふ・・・」

ユイは酸欠状態になったのか、ボタンとその場に倒れる。

「とんでもないお転婆娘ね。クールビューティーな岩沢さんとは正
反対」

「雲と泥、月とすっぱん、岩沢とユイ、みたいな」

「ガールズデッドモンスターの一員としてはいかなものかと」

「別のものを探さないか？」

「そうするか」

「こらー！ー！！ちゃんと歌えてただろ！！これでも岩沢さんの
大ファンで全曲歌えるんだからな！！」

憤慨するユイに戦線メンバーは歌の感想を言う。

「心に訴えるものがなかったよな」

「ありませんね」

「ねえな」

「最後のパフォーマンスは最高だったぜ」

「こら——!! そんな曖昧な感性で若い芽を摘み取りにかかるな——!!!! あと最後のは歌の感想じゃない——!!!! それでもお前ら先輩か——!!!!」

「うるせえな」

「すでに言動に難ありだぞ」

うるさいと言う日向と珍しくまともなことを言う野田。

「はあ、バンドにこんなの入れたら球技大会では大題的な作戦は行えないわね」

「球技大会？そんなものがあるのか？」

「そりゃああるだろ。ここは普通の学校だぜ？」

音無の質問にゆりの代わりに答える立木。

「おとなしく見学か？」

日向がゆりに聞くとゆりは笑いながら日向に振り返る。

「もちろん参加するわよ」

「参加したら消えてなくなるんじゃないのか？」

「もちろんゲリラ参加よ。いい？アナタ達。それぞれメンバーを集めてチームを作りなさい。一般生徒にも劣る成績を収めたチームには」

そこでゆりは一度区切り、恐ろしい顔でこう言う。

「死よりも恐ろしい罰ゲームね」

「ええー! ! ?」

「こっちを無視するな――!!」

さっきからユイがうるさいが無視をしている戦線メンバー。

「死よりも恐ろしいって、今のうちに抜けとくか」

立木は死よりも恐ろしい罰ゲームを恐れ、本部から忍び足で出て行った。

立木は本部を抜け出した後屋上に来ていた。

「ふう、誰にも気付かれなかったようだな」

「ところが気付かれてんだよなー、これが」

立木の独り言に後ろから突然答える日向。

「ちっ、ばれたか。結構自信あつたのになあ。てかどうしてここだつてわかつたんだ？」

「俺も音無を誘った後に気付いたんだぜ？多分他のみんなは気付いていないさ。なんでわかつたかつて言うとうひさ子が屋上に行くのを見たつて言つたからさ。でさ、話変わるけどお前つてこの間のギルド降下作戦の時に天使と戦つて勝つたつて聞いたぜ」

「勝つたつて言うのかあれ？ただ天使の腹に蹴り入れただけなんだが」

「まあそこはいいんだ。天使と戦えるつてことはそれなりに運動も出来るつてことだよな？頼む！！今度の球技大会、一緒に参加してくれないか？」

日向は手を合わせ拝むように頼んでくる。

「待つてくれ！！俺は死より恐ろしい罰ゲームが嫌で抜け出してきたんだぞ！？なんでそんなもんに参加しないといけないんだ！？」

「それは俺達だつて嫌だ。それにそれは一般生徒より悪い成績を収めたときだろ？負けない、いや！優勝できるチームを作れば罰ゲームは絶対に無いんだ！！」

「チームメンバーのあてはあるのか？」

「大丈夫だ、俺は人望だけで生き抜いてきた男だぞ？」

「はあ。確かに負けなければいい話だしな。いいだろう、そこまで言うなら参加してやるよ。」

そうして立木は球技大会に参加することにした。

「人望だけで生き抜いてきたと言ってひさ子には断られたけどな」

「おい！？」

音無の発言でさっそく立木は大分後悔した。

番外編 王様ゲーム2（前書き）

本当でしたら10話の後に出すつもりでしたが番外編のほうに先に出来てしまいました。

誤字、脱字、キャラ崩壊などがあるかもしれませんが。

番外編 王様ゲーム2

く！ここから生きて帰るにはゆりが飽きるまで頑張るしかないなんて！！

「ふう、走り終わったぞー。あれ？大山は？」

「大山は・・・」

俺は事の経緯を帰ってきた日向に伝える。すると日向もこのゲームの恐ろしさに顔を青くする。

「日向君が帰ってきたことだから大山君が抜けた分は抜かなくていいわね。次いくわよ」

ついに三回目の王様ゲームが始まってしまった・・・。王様をなんとかして引き当てなければ！！

全員が無言でくじを缶から引く。一番か・・・、王様は一体誰だ？

「うおっしゃー！！！！ついにアタシの時代だー！！！！」
次はユイ、だと！？こいつも大分やバイ命令出してくるに決まっている！！

「日向先輩、くじの番号なんですか？」

「教える訳ねえだろ！？」

！！どうやらユイは日向の番号を知りたいらしいな。という事は、日向を生贄に捧げればユイが王様の時は確実に生き残れる！！

しかし、どうやって日向の持つくじの番号を知ろうか……。あいつ、ユイに見せないために番号が書いてある方の箸の先を両手で握ってやがるから俺の方からでも番号は見えない。

どうすれば、どうすればあいつの番号見ることが出来、かつユイに教えられる？

「ちよつとユイ、早く命令しなさいよ。待ってる間が暇なんだからな！？ゆりがせかし始めた！？ヤバイ！！なんとかしないと！！

「はい、今回は諦めまーす。じゃあ、10番の人は屋上からグラウンドへ飛び降りて！！」

「まじで酷い命令だな！？お前死ぬ痛みわかってないだろ！？」

なんて酷い命令だ！！日向だったらまだいいが誰ともわからないやつにそんな命令をだすなんて！！今度の犠牲者は誰なんだ！？

「oh my god！！」

TKーーーー！！！！

「じゃあTK、王様の命令は絶対だから飛び込んできてね」

ゆりが素晴らしい笑顔でTKに言った。それが仲間に言うことか！？

「TK、頑張れ」

「お前は良い奴だった」

「俺達はお前の事を忘れない」

「生きて、帰ってきてください」

「さあ、根性見せろ！！」

みんながTKに別れの言葉を告げていく。切り替えはええなおい！！とか言いつつちゃっかり俺も言ってるが。

TKも腹を括ったのか、ソファアから立ち上がり少し強張った笑顔で「good bye！！」

と言って本部から出て行った・・・。

しばらくすると外から

「I can flyeeeeeeee！！！！」

と聞こえてきた。

TKーーーー！！！！

「次始めるわよ」

ゆりはTKのことは気にしないかのように10番のくじを抜いて缶の中に残りの十本を入れて混ぜる。

4度目・・・、9番か。

「どうやら俺が王様みたいだな」

松下五段が王様ならそこまで酷い事にはならないな。

「そうだなあ、9番は・・・」

ついに俺が当たったか。さて、なにを命令されるかな。

「今日から一週間、肉うどんの食券が手に入ったら俺に回すこと」

「はあ！？一週間！？そんな長い期間の命令もありなのか！？」

俺がゆりに聞くと頭の上で丸を作ってる。ありなのかよ！！

「立木君は松下君に一週間肉うどんの食券が手に入ったら渡す事、いい？破った場合は・・・」

「破った場合は？」

そう俺が聞くと

「死よりも恐ろしい罰ゲームね」

とやはり素晴らしい笑顔でゆりは言ってきた。

「そ、そんな・・・」

一週間も肉うどん無しなんて・・・いや、オムライス無しよりはましと考えるか。

松下五段は笑顔で「よろしくな」と言って俺の肩を叩いた。

「じゃあいくわよ」

次こそ！！次こそ俺が王様に！！

引いたくじを見るが、王様ではなく2番だった。

「おっし！俺が王様だぜ」

日向が王様か。よし、当てられたのが俺でなくともリアクションしてみるか。

「4番の奴は・・・」

俺は日向が4番と言ったのを確認し、体をビクツとさせる。

日向は俺のリアクションを見たようで、言おうとしていたことを止め、少し考えている。

「よし、天使に告白してこい！立木、4番お前だろ？」

日向は俺の罠に引っかけたようだ。

馬鹿め！俺がそう馬鹿みたいに分かりやすい反応するはずねえだろうが！！

日向がは俺が立たない事に疑問を抱いたのか首をかしげている。そしてすぐにはっとした顔をしてソファから立つ。

「まさか、4番じゃないのか！？」

「そうだよ日向。俺は4番じゃない！2番だ！！さっき遊佐に俺が

聞いた事を忘れたか!!」

そう言っただけが自分のくじの番号を日向に見せると「そういえば・・・!!」と言っただけに手を当てている。

「じゃ、じゃあ一体誰が4番なんだ!？」

そう言っただけで日向が周りを見ると一人体をガクガク震わせているやつがいた。

「お前なのか!？高松!!」

体を震わせる男、高松に日向は聞くと高松は自分のくじ、4番と書いてあるくじを見せる。

「じゃあみんな、高松君が天使に告白する所見に行くわよ」

おいゆり!!それは高松に（精神的に）死ねと!？」

「な!？何故ですか!？何故見に来る必要があるのですか!？私はちゃんと王様の命令は実行しますよ!？」

「そういう問題じゃないわ」

「じゃあ!!」

「見ているのが楽しそうだからよ」

ゆりの一言に高松がへこんだ。

今大山、TK、高松以外の王様ゲームをしている俺達はグラウンド側の生徒玄関前にいる高松が見える教室にいる。なぜ玄関前かと言うと天使がもうすぐそこを通るからだ。

「さあ、高松君はどんな告白を天使にするのかしら？」

ゆりがそう呟く。食堂の方から天使が歩いてきた。

「あの、すこしよろしいでしょうか？」

高松が天使に話しかけた。

「なに？」

天使は歩くのを止め、高松の方に向く。

「貴方のことが好きでした。付き合ってもらえないでしょうか」

普通の告白だな。さて、天使の反応は？

「用件はそれだけ？」

えっ？それだけって？どういうこと？

「えっ？あつ、はい」

高松も予想外な返答に少し混乱したようだがなんとか返事をした。

「そう」

天使はそれだけ言って学校の中へ入っていった。って返事は？

ゆ「これは想定外ね。まさか返事もせずに去るなんて・・・」

日「ちよつ、高松の様子が変だぞ？」

音「あつ、走って山の方へ向かったぞ！！」

藤「高松の目に光るなにかが見えた気がしたんだが・・・」

俺「高松・・・」

あいつ、立ち直れるかな・・・。

「さつ、本部に戻って続きしましょうか」

そんな高松をなんとも思わないような感じでゆりは言う。酷すぎだろ！？

番外編 王様ゲーム2（後書き）

立木は一週間の肉うどん献上で済んだがもう王様に当てられないと
は限らない。

立木は無事に王様ゲームから抜ける事ができるのか！？
まだ続く！！かもしれません

7話（前書き）

短くてすみません。

まだ球技大会始まりません。

7話

その後、立木は日向、音無と共にメンバー集めのために松下やTKを誘いに行ったが、やはり他の戦線メンバーに先にとられていた。

「なあ、やつぱ参加は無しにして欲しいんだが・・・」

「駄目に決まってるだろ！」

「そつえばまだ球技大会の種目聞いてないんだけど」

「野球だよ」

「全然メンバー足りねえじゃねえか！！やつぱり参加は無しの方向で・・・」

「だから駄目だって！！」

「お困りのようですね？」

突然目の前からこちらに話しかけるような声がした。

前方を見てみると、手すりに足をかけながらポーズを決めているユイが立っている。

「なんだ、悶絶パフォーマンスのデスメタルボーカルか」

ユイに対して猛烈な毒を吐く日向。

「んなパフォーマンスするキャラに見えるか！！」

「見えるよ十分。で、なんの用だよ？」

来たからには理由があると思い日向は適当な感じでユイに質問する。

「メンバー足りないんでしょ？アタシ、戦力になるよ？」

その一言を聞いて日向は顎に手をあて考え出した。

「いや待てよ、デッドボールを顔面に受けて危険球相手ピッチャー

退場・・・」

日向がそう言った後に立木も頭上に豆電球を光らせた。

「当たり前か！！日向！採用だよな！？」

「ああ！採用だユイ！！」

「お前らの脳味噌、とろけて鼻からこぼれ落ちてんじゃねえのか！！」

「ぐはあ!!!」

「あぶね!!!」

ユイは丁度並んで立っていた立木と日向の後頭部に向けて跳躍し、蹴りを入れる。

ユイの跳び蹴りに日向は吹っ飛び、立木はなんとかブリッジで避けた。

「ちっ!!!一人仕留め損ねたか」

舌打ちをするユイ。

「てかよく反応できたな」

と突然の跳び蹴りを避けた立木をすごいと思う音無だった。立木は音無に対して指でVを作る。

「ちよっ、お前!!!俺先輩だからな!？」

吹っ飛んでいった日向がユイに文句を言う。

「おおっと、先輩のお脳味噌はおとろけてお鼻からおこぼれてなっ
ておいでは？」

ユイは頭を押さえて屈んでいる日向に近づき丁寧語（らしきもの）で話しかけ頭をぽんと叩く。

日向はそれに切れ、ユイの顔面に蹴りを入れる。割と本気だったようにユイは2メートル先まで顔面スライディングする。それに腹を抱えて爆笑する立木。

「先輩、痛いです・・・」

「俺だつて痛えよ!!!」

泣きながら言うユイに怒鳴る日向。傍から見ると日向が悪いように見えるが現場にいた立木と音無はどっちもどっちだなと思えなかった。

「でも運動神経は良さそうだな」

「さっきの跳び蹴りも中々のもんだつたぞ、あと今のユイの顔マジ爆笑モンだったな」

「音無も立木も何言つてんだよ!!!こんな頭のネジの飛んだ奴の仲間だなんて思われたくないぜ!!!」

立木と音無の言う事（立木の後半は無視しているが）に猛反発する日向。

「そんな事言っても目つけてた連中に断られまくってるじゃないか」「ぐっ……」

正論を言われぐっの音も出ない日向。

「そうそう 見てましたよ。なのでユイにゃんが加勢しにやってきた訳です」

そこを起死回生と見たのか、痛みがなくなったのか、ユイは日向の後ろに立って言う。よく見るとユイの頭のあほ毛が左右に動きまわっているように見える。

「ああ？もういつぺん言ってみる？」

さっきのユイが言った事に何かが引っかけたのか、日向は藤巻化してユイに聞く。

ユイも何の事が分かったのかも一度言うために咳払いをする。

「ユイ にゃん」

それを聞いたと同時に日向はユイの手を掴みあつと言う間に技をかける。

「そういうのが一番むかつくんだよ!!」

「ギブギブギブギブ!!」

「とつとと行くぞ」

そんな二人に音無は言う。

四人が向かったのは体育館倉庫だった。入り口には前回のギルド降

下作戦の時に椎名が抱いて落ちていった犬のぬいぐるみがあった。
「椎名っち、椎名っちー。どこだー？でてこいよー。椎名っちー」
「何用だ？」

犬を呼ぶように日向が椎名を呼ぶと椎名が物陰から現れた。

「探したぜー。お前、運動神経いいじゃん」

「計ったこともない」

「絶対いけるって！野球、野球やろうぜ？」

「あの日以来」

「あ？」

「その新人り達に遅れをとってしまった理由を、ここですつと考
えていた」

「てつきりあのぬいぐるみの複製をしていたかと思ってた」

「立木はしばらくその口閉じてる。ギルド降下作戦の話か？確かに
こいつらが生き残ったのはありや伝説物だよな」

「あれは運がよかったただけだ」

と音無は謙遜しているが後ろでは立木は頭に手をのせて「いやあ、
それほどでも」と言っており、ユイは「アホですね」と立木に言っ
ていた。

「全ての力において私はお前達を遥かに凌いでいたはずだ」

「だらうな」

「ただ一点劣っていたとすれば、それは集中力」

「お、このぬいぐるみ後ろにぜんまいあるじゃん。回すとどうなん
だ？」

「それもあんだの方が遥かに上だろ」

「な！？尻尾も動く、だと！？」

「だからお前は黙ってる」

「あの日以来私は、この竹箒を指先の一点で支え続けている」
その一言に立木、音無、日向、ユイがアホを見るかのような目にな
る。

「アホですね」

ユイが日向に言う。

「アホだが戦力だぜ？」

アホを否定しなかった日向。

「いい頃合だ。勝負だ、小僧達」

そう言つて竹箒を下ろさずに挑発する椎名。

「箒立ててなんの勝負だよ・・・」

「もちろん腕っ節だろ！！」

「違いよ野球だよ！勝負つつつてもちゃんと個人成績で勝負しろよ！！」

「いいだろう」

「俺達は箒を支えなくてもいいんだよな？」

「もちろんだ。集中力の歴然たる差、見せつけてやろう」

「よし！！決まりだ！！」

「アホばかり増えていきますね！！」

「おい、俺もアホ扱いなのか！？」

立木がユイに言つてもユイは返事をしなかった。

8話（前書き）

テストや文化祭で更新が遅れてしまいました
本当にすみませんでした

誤字、脱字、意味不明なところがあるかもしれません

8話

「ふん、はあ！へい！へい！へい！いいいい！！」

現在日向達は第二連絡橋下の河原で上半身裸でハルバードを振り回しながら奇声を発する男、野田を少し離れた岩陰から観察していた。
「なあ日向、野田も誘^{へんたい}うのか？変態がチームにいたらチーム全体が変態に見られるような気がするんだが・・・」

野田に聞こえないように小さい声で立木は日向に言う。

「仕方ねえだろ。見る、あんな棒捌きが出来る奴、あいつ以外に見たことあるか？」

「いや、あいつ以外にハルバードとか使う奴を見たこと無いんだが・・・」

「それに、あいつを誘う奴なんていねえ。直情的でゆりっぺ以外の指示には従わねえからな」

「つまりあの人もアホなんですね」

ユイが野田にもアホと言う不名誉な称号を言い渡した。

「だがアホは利用できる。それをお前らに見せてやる」

そう言い日向が野田の方向に歩いていったので立木達もそれについていく。

「ふっ、ついにきたか。決着の時がな！！」

「まあ待て、まずは小手調べから。球技大会でお前とこいつ、どちらの運動神経が上か見せてもらおう」

ハルバードを音無に向ける野田を日向はなだめる。

「何故そのような事をする必要がある？」

「強いだけじゃゆりっぺは振り向いてくれないぜ？」

日向の言うのと野田はしばらく黙り、「ふっ」と笑う。

「いいだろう！」

「アホだ、利用されていることに気付いていない」

「これがアホの有効利用か……。日向、恐るべし」

「これでメンバーは6人だな」

「ごめんな」

そう言い戦線メンバーの一人が去っていった。

「ほとんどの戦線メンバーが別のチームに取られてるな」

「まだ6人だぞ、どうするつもりだ？」

「その箒を下ろさないのか？真面目に喋ってもギャグにしか見えねえぞ」

「それは私の集中力が途切れた時だ」

「んじゃこれでどうだあ！！」

ユイは椎名に回し蹴りをするが椎名は後ろに数歩下がるだけでそれを箒を落とさずによけた。

「なに！！？」

それにユイは驚く。

「これならどうだ！！」

立木も二丁の拳銃を使い椎名の死角から箒を狙って撃つが、それも椎名は手を動かすだけで箒に当たるはずだった弾をよけた。

「嘘だろ!？」

まさか音速の速さで拳銃から出た弾を、しかも死角から撃たれたものをよけれとは思っていなく、立木は目を見開き大声を出しながら驚く。

「おいおい、仲間割れすんなよ」

「仲間割れじゃねえよ、椎名の箒を落とそうとしただけだよ」

「それだけのために銃を使うな!! なあ日向、お前もなんとか・・・

日向？」

日向の名前を呼ぶが返事をしなかったのもう一度音無が呼んだが、日向は返事をせず空をじーっと見ていた。

「日向!」

今度は肩を叩いて日向を呼ぶとようやく日向が音無に反応を見せた。

「どうしたんだ？」

「あ、ああ、なんでもねえ。ちょっとぼーとしちゃった。そうか、しょうがねえな。後は一般生徒で賄うか」

「はいはい! アタシ、仲のいい友達連れてきますよー!」

ユイは椎名の指先の箒を落とそうとしながら日向に言う。

「ん? 友達？」

「あ、エア―友達か。戦力外戦力外」

「んだとお!? アタシはてめえみてえなぼっちじゃねえんだよ!!」

「ああ!? 俺だってぼっちじゃねえよ!!」

「喧嘩するなよ」

日向達はユイの友達がいるというクラスの前で三人の女の子と廊下にいた。

「私達その・・・」

「ユイにやんさんのファンって言つかー」

「勝手に親衛隊って言つかー」

「ユイにゃんは才能におごることなく、地道にストリートライブとか積み重ねてきていますから」

ユイは胸を張りながら日向の肩に手をかけて言う。

「ミィハー女ばかりじゃねえかよ、こんなもん戦力になるかあ？」

「けどこれで9人、野球が出来る人数になるな」

「そうだよなあ、わがままは言ってらんねえか。俺達が頑張ればいだけだしな」

そして、球技大会当日。

「おおー！我らが戦線チームはどこも順調に勝ち残ってますよー！」

「んじゃ、いっちょ俺達も行きますか」

そう言い日向達が審判に近づくと審判に「またか・・・」と言われた。

「この次に進めるのは俺達のチームに勝った方ってことでじゃんけんで決めてくんない？」

「どんどんチームが増えてきやがる・・・」

「だって俺達だってこの学校の生徒だぜ？ほら、お前もお願いしろよ」

日向がユイに話をふる。

「本気でこいやー！あああ！ー！」

「ドスきかせてどうすんだ!!」

日向が関節技をユイにかける。

「関節が砕けますう！！ホームランが打てなくなりますう！！」

「ここで負けたら罰ゲーム決定だかな。初戦は気合入れねえと。一番、お前な」

日向は音無を指さしながら言う。

「俺かよ」

「俺は!？」

音無を押して野田が日向に聞く。

「まあ待て。で、二番が俺。椎名が三番。そして四番がお前だ。走者一掃しねえとお前の負けだからな」

「ふっ、いいだろう。容易い事だ」

「7点以上でコールドだ。天使が来る前に片付けちまおうぜ。よしいくぞ」

そこで日向は一度口を閉じ、握りこぶしを作る。

「ファイトー」

「才——！！！！」

日向と立木は大声を出す。が他は誰一人出さなかった。

「お、おー」

「お、おー……」

辛うじて音無と三人の女子は小さい声で言ってくれた。

「……お前だけだよ、乗ってくれたのは……」

「なんか、団結力が恐ろしくなかったな、日向」

「プレイボール」

そしてゲームは始まった。

音無が相手の球をセカンドとファーストの間に打ち、一塁行つたなと全員が思っていると横から野田が走ってきてその球を音無に打ち返した。

音無もむきになって打ち返した。それをまた野田が音無に打ち返し、音無が野田に打ち返しの繰り返しになり審判から「アウト！」とコールされ、音無は一塁に進めなかった。

2番の日向、3番の椎名は順調に塁に出る事ができ、ついに4番の野田まで回った。

野田はふざけた構えだったがホームランを打ち、日向チームに3点が入れた。

5番はユイ。ベンチで日向に「ホームラン絶対打ってやるからな！」と言っていたにも関わらず三振。ベンチに帰ってきた所で日向に関節技を決められていた。

「ヒットどころかかすつてもいねえじゃねえか!!」

「痛いです!! 痛いです!!」

「ついに俺の番か」

「一発かましてこいよ立木!!」

関節技をかけている日向からの励ましを受け取り、立木は打席に立つ。

そんな励ましをもらって打席に立ったものの相手ピッチャーがフォアボールしたので意味が無かった。

7番はユイの友達だった。が三振してスリーアウトチェンジになった。

「なんで俺がピッチャーなんだ？」

「野田がホームランしたんだ。お前はスリーアウトしないと負けだかな」

「俺達は誰と戦ってたんだ！？」

そんな会話が音無と日向の間にあっただがどうでもいいことだろう。

8 話（後書き）

次回で球技大会は終わります
多分・・・

オリキャラ紹介（とは言うもののまだ一人しかオリキャラはいないのですけど）

名前 立木^{たちき}

外見

少し茶色が入った黒髪を肩まで伸ばしており、頭の天辺にあほ毛がある。

顔は中の上から上の下。

目の色は黒。

身長は音無と同じくらい。

趣味

銃の組み立て

料理

特技

知恵の輪

声真似

好きな物

食堂のオムライス

銃

他人の不幸

嫌いな物

辛い食べ物

ハンマー

自分の不幸

いつの間にか記憶が無い状態で死後の世界にいた男。銃の組み立てと料理は死後の世界に来てから趣味になった。

他人の不幸を好む外道、とは言っても行き過ぎた不幸は好まず、逆に慰めたりする。

かなりの精度でその人の声真似ができる。

実は立木は本部の入り口の対天使用トラップに二回かかっており、一回目はそのトラップの正体を知らずに吹っ飛ばされたが二回目のときにハンマーが自分を吹き飛ばしていたものと知り、それ以来ハンマーが嫌いになった。足の速さは椎名と同等かそれ以上。制服の様々な所に銃のパーツが仕込んである。

本編に出ていない設定などもあります。が今後使う予定です。

オリキャラ紹介(とは言うもののまだ一人しかオリキャラはいないのですけど)

オリジナルキャラクター募集中です

名前、見た目、性格、喋り口調、あれば口癖をお願いします
作者が狂喜乱舞します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3201x/>

Angel Beats! ある男の死に様

2011年11月11日03時22分発行